

論文審査の要旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 (文学) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	任 萌萌
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) 頼三樹三郎漢詩研究 一頼山陽との比較を視座として一			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)	教授	佐藤 利行	
審査委員 (Name of the Committee Member)	教授	高永 茂	
審査委員 (Name of the Committee Member)	教授	根本 裕史	
審査委員 (Name of the Committee Member)	准教授	郭 穎 (厦門大学)	
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文は、江戸後期を代表する文人頼山陽(1781～1832)の三男である頼三樹三郎(1825～1859)の漢詩を取り上げ、父山陽の漢詩との比較を視点としてその特徴を検証し、併せて三樹三郎の詩学観について論述したものである。論文は序章、第一章「頼三樹三郎の頼山陽を偲ぶ詩」、第二章「詠史詩に見られる頼山陽の受容」、第三章「頼三樹三郎の詩と『唐絶新選』」、第四章「頼三樹三郎の詩の『狂』字の用い方」、終章の全六章から構成されている。</p> <p>序章では、研究の動機・目的を論じ、先行研究を整理・分析した上で、本研究の位置づけについてまとめている。</p> <p>第一章では、頼三樹三郎の漢詩の中で、父山陽のことが如何に偲ばれているのかということ論証する。すなわち、三樹三郎の自筆写本である『雑詠』は諸家の詩を手写したものであるが、その中には山陽の詩が半数以上を占めていること、また三樹三郎は山陽の著作である『増評唐宋八大家読本』を幼少期から熟読していたことなどから、三樹三郎は幼い頃から山陽の詩作を手本とし、その詩学観を学んでいたことを明らかにしている。また三樹三郎の詩には、山陽が好んでいた『平家物語』を典拠とするものが多く、中国の典拠の用い方も山陽と同様な趣向が見られることを解明している。</p> <p>第二章では、頼三樹三郎の詠史詩に見られる山陽の影響について述べる。三樹三郎の詠史詩には同時代の他の文人の詩作には見ることのできない特有な表現方法が用いられている。それは父山陽に見られる詩語や典故の用い方と共通なものである。具体的には日本の典故と中国の典故とを多用して自己の歴史観を表現しようとするものであり、そこには和と漢との人情が同じであるとする和漢同情の思想を見ることができるとする。また三樹三郎の詠史詩の連作「詠清初諸子係明遺民者」で取り上げられる中国明末の遺民は、『山陽先生書後』の影響を強く受けている。幕末維新の動乱期に生きた三樹三郎は、明末の遺民に親近感を持つとともに、父山陽の影響を受けていたことも要因の一つであると結論づけている。</p> <p>第三章では、頼三樹三郎の詩と『唐絶新選』との関わりについて述べる。『唐絶新選』は頼山陽</p>			

が文化七年（1810）、菅茶山の廉塾にいた時に選抄した選集であり、それが出版された時に三樹三郎が後叙を書いた。山陽の自序と例言と、三樹三郎の後叙とを比較検討することによって父子の詩学観が明らかとなる。すなわち、詩体としては唐詩の絶句が、内容的には真実性があり、また韻律の整っているものが理想的な詩であるとする。繊細な詩風を排し、勁拔な詩風を好むという父子共通の詩学観を見ることもできることを論述する。

第四章では、頼三樹三郎の漢詩に見られる「狂」字の用法について分析する。三樹三郎の詩には「狂」字を用いて自己を表現するものが多く見られる。これは父山陽が「狂」字を用いて自称する詩との共通点であり、それは当時の陽明心学の影響であることも指摘している。また両者の典故を比較する時、例えば「狂夫」という詩語を三樹三郎は、晩唐の杜牧が山東の乱を思い、その対策を講じて「罪言」を作ったことで、杜牧を「狂夫」と称しているのに対し、山陽は若い頃に奔放不羈にして豪遊した杜牧を自ら重ねて「狂夫」と言っている。こうした用法の異なりには、二人が生きた時代が詩作に影響していることを論じている。

終章では、本研究をまとめ、今後の課題と研究の展望について述べる。

本論文は、頼三樹三郎の漢詩を丁寧に読解分析し、作品に見られる詩語や典故技法などの特徴、父山陽の影響、詩学観を解明したものであり、これまでに取り上げられることのなかった漢詩人としての頼三樹三郎に焦点を当てた論文である。今後の課題としては、幕末志士としての三樹三郎を視座としての漢詩の分析を行う必要がある。また、同時代の文人達の漢詩との比較、江戸期における三樹三郎の位置づけの解明などをしなくてはならない。今後、更なる進展が期待できる研究として高く評価できる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)